

イソップ寓話にみる訓蒙について

谷出 千代子

仁愛大学人間生活学部

A Study on Moral Lessons Found in Aesop's Fables

Chiyoko TANIDE

Faculty of Human Life, Jin-ai University

一つの特別な事例から世の中の一般的生き方の原則を定義づけるときに発生する物事の本質。それを直截的な伝え方ではなく喩えて伝えた手法を寓話の成り立ちと考えるとき、その喩えは必ずや訓言とか訓蒙という道徳的規律を有する形態をもって示される。その形態に見受けられる伝承性、教育的配慮、時代の特質などの諸事象を分析し、そこに証左できる事柄から訓蒙の在り方を再検討した。

結果、物語の認知度と年代別読者層の関係で最も認知度の高い物語 10 編が挙げられた。これらの物語はタイトルと訓蒙の関係性では、登場人物列挙型よりも訓蒙からくるプロット定着型の方が読者層により広汎な浸透性を見出すことができた。さらに、時代の流れに迎合したり翻弄されたりすることなく自流の信念を編集出版の特色として通達させた発行物を発見できたことが大きな成果と言える。

それぞれの時代の軌範を担ってきた物語の役割と重要度を感じた。

キーワード：イソップ寓話 訓蒙 認知度 軌範の対象

1. 問題の所在

1977 年出版『イソップどうわ』『イソップどうわ(2)』にはⁱ、20 話の作品が掲載されている。いずれも日本では一般的に認知度の高い内容の物語である。

300 編を優に超えるイソップ寓話ⁱⁱの中から 20 編に選択したその出版物の意図するところとは何か、それら 20 編に注がれている訓蒙の分析と共に選択の要因を探るところである。

そして、これらの寓話の時代的受容実態が、その時代に求める民衆の要求や教育の意図するところにつながるのではないかという私見を基盤として、時代を遡りながら、物語に表現されるキーワード、さらに背景などに描かれる訓蒙を分類し、教育的に希求する様相を検証する。

2. 手続き

(1) 対象作品の選書

- 底本 1 村山桂子文／西島武郎他絵『イソップどうわ』『イソップどうわ(2)』那須辰造監修／井上靖編集／波多野完治・湯川秀樹顧問／講談社 1977 (昭和 52)
- 底本 2 岩本康之亮他文／谷口ユミ他絵『世界の童話 イソップ絵話』波多野勤子・浜田廣介・村岡花子監修／小学館 1968 (昭和 43)ⁱⁱⁱ
- 底本 3 川端康成文／村上松次郎他絵『トツパンの繪物語 イソップ 1-3』トツパン 1953 (昭和 28)^{iv}
- 底本 4 酒井朝彦新訳『繪入りイソップ物語』日本圖書出版社／1936 (昭和 11)^v
- 底本 5 深山晃編／萩野光風絵『カタカナ讀本 イソップ物語』春洋社 1930 (昭和 5)^{vi}
- 底本 6 古閑八州子著／巖谷小波監輯『カナイソップ』第一出版協會 1922 (大正 11)^{vii}

底本7大久保常吉編集『伊曾保物語』春陽堂 1885 (明治18)^{viii} 当該書に関しては、汀島武夫・日下部鳴鶴の所蔵しているものを、武内馬溪が繪入り朝野新聞に掲載したもので、子ども対象という狙いではなく、一般に知って欲しい物語としてのねらいを序に記している。(傍線筆者)

の7点を底本とした。

これらの作品を対象とした背景は、第1に挿絵や絵入りであることに重点を置いた。第2に例えば358編^{ix}の膨大な物語から20～30編に絞り込まれて掲載発刊されているものであることに焦点をあて、出来るだけ条件を併せたものである。いわゆる子ども対象としたものとしてアプローチが容易であるためとした。

(2) 検証の視点

底本に掲載している作品について、その物語の意図する訓蒙の諸相を時代別に分類していくために、対象とした時代は、1970年代から徐々に遡り、それぞれ1960年、1950年、1930年、1920年、1880年代で前述の選択要件に沿った作品、付帯条件の類似した作品を抽出していった。そして、それらの物語の認知度調査や訓蒙の主旨をテーマ別に分類して尺度基準を設定し、そこから時代別教育的配慮を検証していった。

3. 物語の認知度

(1) 認知度調査について

先ず底本1の寓話20編はどの程度の認知度があるかを、概括的な年代に分けた被験者を対象に調査し、次のような結果を得ることができた。表1がそれである。

表1 年齢別物語認知度 (単位=人数/%)

NO	作品編数/年代	50～70歳代	30～40歳代	10～20歳代
1	1～5編	0	0	0
		0	0	0
2	6～10編	9	12	34
		29.0	41.3	87.2
3	11～15編	17	12	4
		54.8	41.4	10.3
4	16～20編	5	5	1
		16.1	17.2	2.6
	総人数	31	29	39

認知度調査の被験者について、50～70歳代31名は地域で結成している図書館読書ボランティア及び読書会の構成員、30～40代29名は図書館読書ボランティア及び学校図書館ボランティアの構成員、そして10～20歳代39名は大学生である。

表2 作品別認知度 (単位=人)

NO	作 品 名	50～70歳代	30～40歳代	10～20歳代
1*	らいおんとねずみ	29	27	26
2	くまとたびびと	12	7	0
3*	うしとかえる	30	29	39
4*	うそつきなこども	31	29	39
5*	うさぎとかめ	31	29	39
6	きんのたまご	22	19	2
7*	いぬのよくばり	31	29	39
8*	ありときりぎりす	31	29	39
9*	きたかぜとたいよう	31	29	39
10▽	じぶんのことはじぶんで	0	0	0
11*	きんのおの	31	29	39
12	ありのおんがえし	26	20	30
13	つよいぼう	11	9	0
14	しろいからす	15	14	1
15	たべすぎたきつね	20	12	0
16*	まちのねずみと いなかのねずみ	30	26	30
17	つるとくじゃく	25	20	1
18	りこうなひつじ	21	19	3
19	おしゃれなからす	28	22	2
20	しかとりようし	26	16	1

ここでは高年齢層ほど寓話に馴染みが深く、若年齢層ほど馴染みが浅いことが確認できる。年齢的差異はあっても全体に6編以上の物語を認知共有しているが、20編により近く認知しているという実態は見られなかった。しかしながら、若年層には、ある一定の時期一定の物語に触れる機会があったことや年齢層を超えて特定の物語が広く流布していることが窺える。特に10代後半から20代の若者たちは87%という高数値で10編余りの物語に接していると解釈できた。20代前後の若者は、この先道徳性を含んだ寓話の性質柄、年齢や体験を重ねるに従って寓話の内容に遭遇したり、体感する機会が増えるであろうという推量となされた。それは50代前後の被験者8割の体験から、日常茶飯事、社会的に関わる人との接点など諸生活体験のなかで、その時々によソップ寓話に語られる内容や

教訓、戒めに触れる機会が増加するとの口頭回答が得られたからである。

(2) 認知度層に現れた物語

次いでこれらの高数値を示す物語は何か、作品認知頻度を検討すると、上記の表2のごとく非常に偏重ではあるが、予想できる物語の傾向が見受けられた。

調査方法は、作品名一覧表を被験者一人ひとりに配布し、実験者の音声表示と被験者の挙手、一覧表に○印記入法の順で回答を求めたものである。

第1に、作品のタイトルを口頭で伝えただけでプロットをイメージできる物語で先ず挙手する、第2に物語の登場人物及び出来事のプロットの一部の説明でイメージできるものについて挙手を確認し認知しているとみなした。それらを認知者数として換算していった。第3に口頭による説明のみで、作品内の挿絵や描画については一切開示しないこととした。

結果、次のように相対的にまとまりを持った傾向を見出すことができた。

1) 作品番号3, 4, 5, 7, 8, 9, そして11の7編は、全ての年代被験者に渡って100%に近く認知している物語^xであることが明確に示された。

作品番号3「うしとかえる」はタイトルのみでは戸惑いを見せた被験者も、続いて「蛙の母親が……」と伝えるだけで脳裏に物語を構築できたようで一瞬にして挙手による意思表があった。作品番号4「うそつきなこども」はタイトル及び日本における別称「おおかみと羊飼」で全員が回答した。作品番号5「うさぎとかめ」については、当該作品がイソップ寓話と認知していない被験者が大半を占め、意外性を驚きの声と共に表示した。これについては日本の昔話と位置付けていた被験者が9割を超えた。作品番号7「いぬのよくばり」もタイトルを「肉をくわえた犬」と置き換えただけでイメージ構築が容易に行われた。作品番号8「ありときりぎりす」と作品番号9「きたかぜとたいよう」については、即答の挙手であった。そして、作品番号11「きんのおの」は、そのタイトルを「きんのおの ぎんのおの」と読み替えを確認する被験者の口頭回答がいずれの年代でもみられた。

以上のように、この調査にてほぼ全員一致で認知さ

れていることが判明した物語は、幼児期から小学生の時期に生活環境に存在する大人、例えば保育者、教育者、家族によって口誦伝承、あるいは絵本・紙芝居・テレビ番組等媒体物を介して物語に接する機会があり伝えられたことが判った。

さらに、ベスト7には及ばなかったが近似した数値で評価を得たのが、作品番号1「らいおんとねずみ」、作品番号16「まちのねずみといなかのねずみ」である。いずれも鼠の登場をみる物語である。プロットを明示すると聞き覚えのある物語として認知度も高い数値を示していた。

これらに反していずれの年代の被験者にも認知度の全く示されなかった一つの物語がある。作品番号10「じぶんのことはじぶんで」というタイトルの物語^{xi}である。

底本1のプロットでは次のような内容で描写される。

犬に追われた兎が身近にいる自分よりも体格の異なる馬や牛といった大動物に助けを求める。しかしいずれの動物も自分の直面する用足しを優先し、兎は鮑膠もなく断られる。それから「他者に頼らず自分のことは自分でしよう」ということに気付き、兎は自らの力で逃げる、という話である。

この物語を他の底本2～7に記したイソップ寓話に搭載された同一の話、同一タイトル、異質なタイトルだが同一のプロットなどの話材と比較すると大きな相違点と問題点を見出した。

そこでステップとして、作品番号10の物語がそれ以前に出版されている作品に反映していたかどうかを、著者が管見できる範囲で次に物証していく。

(3) 「じぶんのことはじぶんで」の物語の検証

作品番号10と同様なタイトルから実証すると、底本5深山晃編／萩野光風絵『カタカナ讀本 イソップ物語』に「ジブンノコトハ ジブンデセヨ」といった同一タイトルの物語が登場する。タイトルから考えれば当然作品番号10と同じ内容が展開すると考えるはずである。

ところがこの物語は

ヒバリガ ムギバタケニ スヲ ツクツテ ヒナ
ヲソダテ、キマシタ。

アルヒ ヒヤクシヤウガ ムギバタケヲ ミニキ
テ『ヨク ミノツタ アシタハ キンジョ ^マノヒト
ヲ タノンデ カリイレヲ シマセウ』ト^{xii}……(傍
線筆者)

この話を聞いた子雲雀は母雲雀に巣の引っ越しを急
かせるが、母雲雀は

ヒトヲ タノンデ ヤルヤウデハ マダマダ マ
ガアル

と慌てない。そしていよいよ百姓が隣人に頼らず

モウ グズグズシテハ キラレナイ ジブンデカ
リイレヨウ

と言ったとき、母雲雀は引っ越しのサインを出すので
ある。

そして、当物語の主旨である「自分のことは自分
で」という訓蒙が示される。しかしこの物語を精査
すると、この訓蒙の当事者は百姓であって雲雀ではな
い。しかも冷静に判断する母雲雀の観察眼の鋭どさに
着目させたいのがこの訓蒙といえよう。

要するに「自分のことは自分で」という訓蒙を含ん
で名付けたタイトルが解釈の相違に災いして異なる物
語を連動させてしまったことになる。

確かに兎の話とは全く異質な登場人物で語られる雲
雀の親子の話である。ところがウサギも百姓も「自分
のことは自分で…」に気付くところの主旨には沿って
いて誤りとは言えない。

それでは「雲雀の話」として物語を証左すると、底
本2岩本康之亮他文／谷口ユミ他絵『世界の童話 イ
ソップ絵話』には「ひばりのひっこし」というタイト
ルで物語られている前述の雲雀の話そのままを見出す
ことができる。とすると村山桂子がタイトルの付け方
を見誤ったのか、編者・監修者の川端康成・波多野完
治・湯川秀樹らが主旨とした訓蒙かタイトルか、果た
していずれに重点を置きたかったのか、それとも物語

の展開ではなくテーマ・訓蒙とするところを共有した
かったのか、いずれも識別しがたく不可解な形で残る。

一方、依頼心の強い兎の登場する「じぶんのことは
じぶんで」の方の物語を追ってみると、底本6 古閑八
州子著／巖谷小波監輯『カナイソップ』には「兎ト
友ダチ」と題して底本1と同プロットの兎の物語が掲
載されて、話の展開も村山作品より濃厚に人物の登場
が繰り返され大型化した類似話となっている。

兎ニハ ドコヘ 行ツテモ、オ友ダチガ タクサ
ン アリマシタ。オトモダチノ タクサン アルコ
トガ、兎ノ ナニヨリノ オジマンデシタ。^{xiii}

と、友人の多いことを自慢とする話で物語は運ばれ、
さらに「カリ犬ガ 大ゼイ ーシヨニ、兎ノ オ山ニ
クルト イフ ウハサヲ キキマシタ」と噂話に翻弄
され、もし猟犬が追ってきたらどうしようと慌てた兎
は、疑心暗鬼にかられて自分では友達と思っている馬、
鹿、山羊、牡羊たち動物に追っ払って欲しい旨を告げ
廻るが、いずれも断られる。最後は

ヒトリデ、ニゲルヨリ ホカハナイト オモツテ
アキラメマシタ。早イ足デ ーシヤウケンメイニ
ゲ出シマシタ。

と兎は自らの行動と正しい判断の必要性に気付く話で
締め括られる。

この物語であれば「じぶんのことはじぶんで」のタ
イトルに匹敵した内容として納得できるし、訓蒙とし
ての役割「自分のことは自分で対処する」という見解
にも同調できる。

ところがまたもやこの「兎の話」の訓蒙とするところ
に相違が見られる作品を検出した。

上述の底本外で、楠山正雄譯『イソップ物語』富山
房^{xiv}には「兎と友達」のタイトルで載せられている。
しかし、ここにおける物語の訓蒙は「訓言 友のあま
りの多さは友なきに同じ」と記される。因みにこの作
品の出版は1916(大正5)年初版・1922(大正11)年
10版のものである。これでタイトルとしても座を得
ていた「自分のことは自分でしよう」の訓蒙が崩れて

きたのである。

寓話の使命でもある訓蒙は、語り手や聞き手、読み手それぞれの体験に基づいての解釈の相違から異なっても不思議ではない。またタイトルの付け方も訳者の強調するところで各々異質なものとなっても構わないと思う。さらに、幼年期から大人までの読者層を意識下においた翻訳者、翻案者によっても遍歴はあるであろうし、それぞれの作者や訳者がギリシャ語か英語訳か、何を底本としたかによっても異なるはずである。

よって次にその違いを網羅しながら、時代の特異性などが観えないか究明していく。

4. 「ひばりのひっこし」「うさぎのともだち」、そして「じぶんのことはじぶんで」の変遷

(1) 雲雀の引っ越し、または類似した話

時代を遡りながらみると次のようになる。

1) 1980年版 河野与一編訳『イソップのお話』「ヒバリと農夫」^{xv}では「じぶんのことは、じぶんの力でできるだけ考え、友だちのたすけをあてにして、放っておいてはいけません」と諭す。

同様に1972年二宮フサも『イソップの寓話』「ヒバリと農夫」の最後で「この話は、自分の仕事はできるだけ自分自身でせよ。友達の助けをあてにせず、腹をきめて自分から手をつけよ、とわれわれに教えている」と別記する。^{xvi}

2) 1972年版 加藤輝男著『イソップものがたり』「りこうな おやひばり」では、農夫のセリフ1「近所の人に取り入れを頼む」、農夫のセリフ2「近所の人には忙しいので、親戚の人に頼む」、農夫のセリフ3「明日は家中みんなで麦刈だ」とセリフの変化を子雲雀に聞き分けさせる行程を通じて、親雲雀は1度目「安心しておいで…今度何というかよく聞いておくように」、親雲雀2度目「まだまだ逃げなくてもいい…ゆっくり休んでおいで」、3度目親雲雀は「私達もいよいよ引っ越し…他所の人の力を頼らずに、自分でやろうというのだから…今度は本気で麦刈を始めるにちがいない」^{xvii}（傍線筆者）と、親雲雀のセリフをその都度百姓のセリフと対比させ読者に諭していく手法。ただし別途訓蒙を記す型ではない。

同じく「ひばりのやどかえ」^{xviii}は訓蒙の別記はないが、百姓自らが「いよいよ あしたは むぎかりだ。人を あてに しては いられなく なった」と自分のセリフで訓蒙に及ぶ。（傍線筆者）

「むぎばたけのひばり」^{xix}「ひばりの およこの おひっこし」^{xx}「ひばりのやどかへ」^{xxi}なども戦後の日本が復興、経済高度成長期に発刊したイソップ寓話で多彩に掲載されている。これらも同様に訓蒙の別記はないが、百姓や親雲雀のセリフが十分に読者を戒めの心情に至るよう会話を通して導いている。

それでは終戦前から昭和初期までを辿ってみる。

3) 1937年立石美和譯「雲雀の母子」^{xxii}では百姓が「もう、ぐづゝしてはゐられない。明日こそ愈々刈入だ。みんな俺のあとについて、さあ、働け、働け」と自らの掛け声で奮い立つ様子が描かれる。母雲雀も同様「もう他所の人達を、あてにしないで、自分で仕事にかゝると、云ってゐるからね」とセリフを通して、訓蒙を発揚させる。

4) 1929年解題松村武雄『イーソップ寓話集』「雲雀とその子」では簡潔な訓蒙「自助こそ最上の助力なれ」と提示する。

大正期にも5種の同じ物語を抽出した。代表的なものとして次の3作を記す。

5) 前出1922年楠山正雄『イソップ物語』「雲雀の母子」^{xxv}でも「訓言 自ら助くるものが最も善く助くるもの」と明示する。

6) イソップ寓話の漢文訳で、1918年寓話詩「雲雀及彼雛」^{xxv}などにも掲載されている。訓蒙を別記していないし出版社の記載もない。和綴じで表紙は光沢のあるシルク（布）で製本されている貴重書である。

7) 1920年西垣堯則『新譯イソップ物語二百話』はそれまでの英語教育テキストと異なり、本文や訓蒙、説明共に日本語で記述してあるが、訓蒙を再度英語訳で記しそれらに対する講釈と説明が懇切丁寧に付記されている。次の通りである。

Self-help is the best help

《講》…自分自身ほど助けになるものはなし。

《説明》…依頼心のある者は、何事も仕遂げることの出来ぬものでありまして、自分が手を下し

て仕さへすれば何事でも成就するものであります、人頼み程あてに成らないものはありません。それで小供の内から自分の物は自分で始末をつける癖を付けて、學用品や本や自分の着物ぐらひはちゃんと自分で始末する様にしなくてはなりません。

さらに次の格言が添えられている。

格言 ▲天に自から助くるものを助く（スマイルス） ▲自ら爲し得べき物を人になさしむる勿れ（シエノエルソン） ▲自己の力にてなし得ることは他人に託する勿れ（ジョンドノー）

明治期に入っては6編の物語「雲雀と雛」^{xxvi}「雲雀の名言」^{xxvii}「親雲雀子雲雀」^{xxviii}「雲雀と雛」^{xxix}「雲雀ト彼レノ幼雛」^{xxx}「雲雀及彼女ノ雛鳥」^{xxxi}を確認できた。

これらには全て別記された訓蒙があり、譯述者や編者の意図する思いが表記されている。その一つを引用してみる。前述上田萬年編・解説のものである。

訓言 仕事を善くするにわ、自ら爲すに如かず。

解説 此わ自任と云うことの義務を教えたものです。西洋の諺にも、『百姓の靴についた土わ、畠の中でも一番肥えた土』と言います。自分で出来ることに、人を當にするくらい愚かな事わありません。くれぐれも自分の手を友達としなければなりません。（傍線筆者）

というわけである。下線のように、「友達に頼るな」というような訓蒙が読みとれる。先ほどの友を当てにした兎の話と混同しそうなところに行きついた。些少の解釈の視点や低位置から解釈する姿勢であれば当然こうした誤謬が有り得ることが理解できたし、論証の証となった。

訓言を物語の末尾に別途記載しているのは明治期では前出した全ての作品に、大正期も前半の作品には丁寧な解説を含む訓蒙が挙げられる。

ただ、この物語に付された訓蒙は全て「農夫の依存か、自立か」に判断が委ねられた訓蒙であった。だが、

母雲雀の「鋭利な判断力」や今日的受容性の高い「子育てのモデル」的訓蒙表記が一話も存在しなかったことを問題としておく。いずれにしても、寓話の本来の姿に忠実に沿って表記されていることは窺い知るところである。

（2）「うさぎのともだち」の変遷

これに関しては三編の物語のみを見ることができた。タイトルは二反長半「むだだのみをしたウサギ」^{xxxii}村岡花子の「ウサギ ノ 友ダチ」^{xxxiii}そして楠木正雄「兎と友達」^{xxxiv}である。楠木のは「雲雀の母子」も掲載されていた前出書である。

先ず全体に掲載数が少数であるが、これらには楠木の「友のあまり多きは友なきに同じ」の表記を除いて別記訓蒙はない。本文末尾に兎自身が自己反省し、持ち前の早足を駆使し逃げる場面で終えている。

本稿のねらう訓蒙やタイトルの相違が物語の解釈の相違として立証するきっかけとなったのがこの物語であるので今一度吟味したい。要するに「自分のことは自分で」か「友達の価値」を問う方かという点である。

「じぶんのことはじぶんで」について表記されている物語は村山・深山以外には全く見付けられなかった。ということは、翻訳者、翻案者、そして編集者のそれぞれの解釈の相違はあったとしても、これら二つの物語を村山桂子の付したタイトルのごとく解釈する作者、訳者、編者はいないというところに帰結した。

そして、物語「兎の友達」における「自分のことは自分で解決する型」と「多き友は無しに同じ型」の訓蒙、物語「雲雀の母子」における農夫主体の「自分のことは自分で型」か母雲雀の「子育てモデル型」かのことも言及できるのが訓蒙、すなわち著者自身の解釈でさえ読者のそれぞれの立場で解釈すればこの様に相違が見えてくることも異論とはできないことも判明した。

（3）「じぶんのことはじぶんで」型の存在

当該タイトルでの物語は先の二物語以外見出すことは出来なかった。タイトルの付け方に法則性がある訳ではないが、登場人物からくる題名、訓蒙からくる題名の2パターンが多出していることは記すまでもない

表3 抽出作品別物語掲載一覧

村山桂子	岩本康之亮他	川端康成	酒井朝彦	深山 晃	古閑八州子	大久保常吉
1973 (S48)	1968 (S43)	1953 (S28)	1936 (S11)	1930 (S5)	1925 (T14)	1885 (M18)
底本 1	底本 2	底本 3	底本 4	底本 5	底本 6	底本 7
ありと きりぎりす		○	○	○	○	○
うしと かえる		○	○	○	○	○
きたかぜと たいよう		○	○	○	○	
おしゃれな からす	○	○	○			○
うそつきな こども	○	○		○	○	
うさぎと かめ				○	○	
くまと たびびと		○		○		
きんの たまご	○	○	○		○	○
いぬの よくばり		○	○	○	○	
らいおんと ねずみ		○	○	○		
きんのおの		○		○		
ありのおんがえし		○	○			
つよい ぼう		○			○	
じぶんの ことは じぶんで	▽	▽印については本文中に記載		▽	▽	
まちの ねずみと いなかの ねずみ		○			○	
つるとくじゃく	○		○			
たべすぎた きつね			○			
しかとりょうし		○	○			
りこうな こひつじ		○		○		
しろい からす					○	
計	5	15	11	11	11	4

ことであった。

5. 底本にみる物語選択の型

底本1に抽出された20編の物語が底本2～7にどのような描かれ方をしているか、次に比較する。

表3のごとく当初抽出した作品はベースとなる底本1以外に、昭和前後期から2作品ずつ、大正期、明治期に1作品ずつという年代とした。物語数による比較は言及するまでもないことだが、最大15物語、最少4物語を共有している。また1物語を底本全てに掲載しているものはなかったが、6物語の共有は3作品、5物語の共有は4作品と存在した。時代を超えてイソップ寓話に注視し共有する物語には共通のものがあることが判った。

抽出した作品群は前述の条件のように、絵入りでかつ20～30編前後の物語数であることとして選択した結果では、表3をみる限りで多くの物語を共有してい

るように思われる。例えば底本3での共有率は41.7%と半分に近い。底本4では30.0%，底本5，6では27.5%，28.2%と30～40%の割合での共有率であることが判明した。しかし、底本1を基準にしている中で、底本2，底本7は非常に少ないことが判る。言い換えれば底本2には他に24編の物語を掲載しており、共有率は14.2%にしか過ぎない。底本7においても32編別の物語を載せているが、底本1との共有率はこれも13.5%程度である。従って、共有する数の問題ではなく、寓話の本質である訓蒙の頻度、訓蒙の役割等がこれらの物語の数値を超えて重要な位置となるであろう。

そこで、これらの物語に含まれる訓蒙の傾向をみると、共通している訓蒙キーワードは次のように列挙分類できる。

自立・正直・知恵・協力（助け合い）・親切・優しさ・勤勉など一般的生活空間で主に必要な行動としてみなされる正志向のもの、これに對峙したパターンで臆病・

嘘つき・欲張り・恩知らず・怠慢・強引・油断など負の志向と見なされがちなものも背景から窺える。正と負のバランスは拮抗していて数的に表示できるものではないが、敢えて数値化すると表4のように示すことができる。それぞれ別記載されている訓蒙を例示すると以下ようになる。

表4 訓蒙の志向性

正志向	編数	負志向
勤 勉	← 4 →	怠 慢
知 恵	← 6 →	強引油断
優しさ	← 3 →	自己顕示
正 直	← 4 →	欲張り
自 立	← 3 →	臆 病

- ①正直な人が徳をし、欲張りな人が損をする
- ②欲張りは身の損
- ③自慢は身を滅ぼす 自己顕示欲が身を滅ぼす
- ④恩知らずは身を滅ぼす
- ⑤貧しさより安全
- ⑥親切をし合えば、互いに助かる
- 恩は肝に銘じて返す機会を忘れてはならない
- ⑦知恵は身を助ける
- ⑧一人の力より皆で合わせた力は強い

これらの物語及び訓蒙を見ると、①～④は失敗型で主人公は自分の身を滅ぼす物語として展開する。他方⑤～⑧は主人公の力を背景に成功した要因は何かと問う型で展開する。

正と負の志向は相互に対比するキーワードで示すことができるほど、選択された物語には共通部分が存在することも感得することができた。明治期から大正期に使用された当時の小學讀本 には多くの「イソップ寓話」がテキストとして掲載され、読み方の話材として扱われている。いわゆる教育的立場では大変に使いやすく今日という道徳教育の近道読本であったことになる。

6. 挿絵などにおける比較

底本選択で示したように、物語数が少ないということとは「子ども」読者を意識下においているのではない

かという視点で選択した。拠ってここではその挿絵や絵本としての絵を訓蒙の視点から検討していく。対象とした物語は6物語を共有する底本の中で絵が描かれるもので「うしとかえる」から検討した。

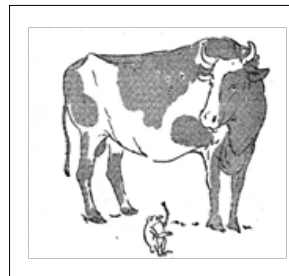
図1 底本1



図2 底本3



図3 底本4-1



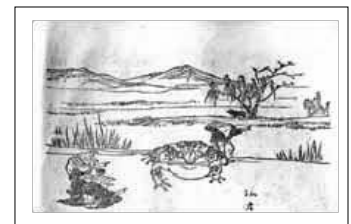
底本4-2



図4 底本5



図5 底本7



底本1は絵本として描写され物語と並行して絵が描かれており4場面と場面数も多くある。その中で最大の大きさで描かれているのが図1である。要するに牛の姿に接近しようとして腹部破裂の憂き目を見るところだ。他の底本では破裂場面が2編、図4のように腹部を破れる寸前まで膨らませたのが3編、そして精緻画で牛と蛙の大きさをリアルに比較しているのが図3である。大抵の底本は1話に1場面のみの挿絵にも

かわらず、この図3底本4は1話に2場面描かれる。強調したのが大きさの比較の他に破裂寸前最大限に膨らませた場面をもう一場面描いている。

当物語の訓蒙は次のようである。

①をよばざる才智位をのぞむ人ハのぞむことをえ寿。つるにをのれが思ゆへ余却つて王が身を亡す事ある奈り

②身のほど知らずの負けおしみは、じぶんをほろぼします

③ちしきがないということは、みをほろぼすこともあるというおしえです

と別記される。この物語は前述の訓蒙のくい違いとは異なり観点はみな同じである。「才智のないものは身を滅ぼす」ことを論している。さらにこの物語展開を描写する絵もほぼ2パターンに分類できる。より丁寧なのが前述の2場面用意された底本4であろう。ただ底本4-1と4-2では挿絵画家が異なるのではないと思われる。牛の精緻な描画に対して4-2のカエルは略画的でデフォルメされた漫画を彷彿させる絵である。さらに印刷画の濃度も異質で不均衡さが見え隠れする絵と思われる。

また図5底本7である。明治期の挿絵によく描かれる手法で、登場する動物が顔面のみ動物そのまま、後の身体表現は人間の様相を呈しているのである。殊にそれらの人間はいずれも武士であったり庶民であったりする。人物は和服を着用し、時として帯刀している姿も見受けられる。明治期に入って学制、義務教育の実施は西洋の在り方を模倣しているようだが、これらの物語には旧態依然とした江戸期の階級制度が息づいたまま描かれることが明らかになった。

訓蒙に準ずる描画においては、最も象徴的な「身のほど知らず」の身を滅ぼす場面やその寸前の描写が描かれ、訓蒙の意図するところを描いており、的を得たストレートな場面として評価できる。

独自の物語採択を主張する底本2種を掲げることができたことも新たな発見として記しておく。

7. 総括

以上の分析から次のようにまとめられた。

1)「じぶんのことはじぶんで」はいずれも古活字本、萬治本ともに取り上げられていなかった。ギリシャ語版でも同様であった。翻訳・翻案者の見解や訓蒙に対する姿勢の違いと思われた。

2) 訓蒙の役割を重んじた日本の教育や生活の中でのイソップ寓話の位置づけは大変大きいものであることが判った。

3) 現代から時代を遡ることで、著名な作家や新聞社が寓話に照射して、人々の生活の中に寓話本来の道徳律を浸透させようとする配慮や姿勢が見受けられた。いわゆる子どもだけの物語ではなく、今日の日本人に受け継がれる礼儀正しさや律義さに繋がる信条を察知できた。

4) 時代を超えてイソップ寓話に求める訓蒙は共通であり、それがすなわち人間の歩むべき道、人々が求める道と判断し、そのことについて検証することができた。

引用、参考文献

- i 村山桂子文／西島武郎他絵『イソップどうわ』『イソップどうわ(2)』那須辰造監修／井上靖編集／波多野完治・湯川秀樹顧問／講談社1977(昭和52)底本1とする。
- ii 昭和50年代に「Esope fables, texte établi et traduit par Emil Chambry, Paris, 1927」のギリシア原文によった山本光雄訳『イソップ寓話集』岩波書店(岩波クラシックス46)のものが、年代的にも翻訳の背景となる原文からしても好適条件であると判断した。
- iii 岩本康之亮他文／谷口ユミ他絵『世界の童話イソップ絵話』波多野勤子・浜田廣介・村岡花子監修／小学館1972年版加藤輝男著『イソップものがたり』1968(昭和43)を底本2とする。
- iv 川端康成文／村上松次郎他絵『トツパンの繪物語 イソップ1-3』トツパン 1953(昭和28)を底本3とする。
- v 酒井朝彦新訳『繪入りイソップ物語』日本圖書出版社／1936(昭和11)を底本4)とする。
- vi 深山晃編／萩野光風絵『カタカナ讀本 イソップ物語』春洋社 1930(昭和5)を底本5とする。
- vii 古閑八州子著／巖谷小波監輯『カナイソップ』第一出版協會 1922(大正11)を底本6とする。
- viii 大久保常吉編集『伊曾保物語』春陽堂 1885(明治18)を

- 底本7とする。
- ix 前掲書注 ii に準ずる。
- x 表2 作品別認知度のNO (ナンバー) 欄に*印の付されているものが該当する。
- xi 表2 作品別認知度のNO (ナンバー) 欄に▽印の付されているものが該当する。
- xii 前掲書脚注viに同じ pp16-21
- xiii 前掲書注viiに同じ pp32-36
- xiv 楠山正雄譯『イソップ物語』富山房 1922 pp442-443
- xv 河野与一編訳『イソップのお話』岩波書店 (岩波少年文庫 1009) 1980 (S55) pp312-313
- xvi 二宮フサ『イソップの寓話』白水社 1972 pp231-232
- xvii 加藤輝男著『イソップものがたり』ポプラ社 1972 pp25-36
- xviii 田中豊太郎編著『イソップ物語』ポプラ社 1972 pp56
- xix 宮崎紀雄著『イソップどうわ』童話春秋社 1950 pp8-13
- xx 五島謹一編『イソップ名画集』小峰書店 1949 pp22-23
- xxi 岩村信二『愛育文庫 イソップ物語』愛育社 1946 pp14-16
- xxii 立石美和譯「雲雀の母子」金の星社 1937 pp27-29
- xxiii 解題松村武雄『イソップ寓話集』近代社 1929 pp154-155
- xxiv 前掲書脚注 14 に同じ pp128-130
- xxv 東皐山人 寓話詩「雲雀及彼雛」1918 pp37-38 出版社の記載はなく和綴じで表紙は光沢のあるシルク (布) で製本されている。
- xxvi 馬場直美編『ポケット新譯伊蘇普物語』岡村盛花堂 1910 pp167-168
- xxvii 雨谷一菜庵譯『伊蘇普物語』吉川弘文館 1910 pp220-221
- xxviii 上田萬年解説『新譯伊蘇普物語』鐘美堂 1908 pp14-18
- xxix 佐藤潔譯『正譯伊蘇普物語』小川尚榮堂 1907 pp7-10
- xxx 元木貞雄講述『伊蘇普物語直譯講義』小川尚榮堂 1901 pp7-10
- xxxi 栗野忠雄譯述『直譯講義全書第壹篇 伊蘇普物語直譯講義全』金章堂 1897 pp6-9
- xxxii 二反長半著『イソップ物語 [イソップ寓話] 』偕成社 1978 pp113-117
- xxxiii 村岡花子著『日本イソップ繪物語』大日本雄辨會講談社 pp174-176
- xxxiv 前掲書脚注 14 に同じ pp422-423
- xxxv 古田東朔編『小學讀本便覧第1巻』～『同7巻』武蔵野書院 1978 ～ 1984